太平に狎れた江戸時代

切支丹弾圧の被虐に秘めた娘の復讐

目次

一. 全裸殉教……三
二. 淫肉奉公……一九
三. 殉難志願……三八
四. 極限拷責……六一
五. 女芯陵辱
六. 全裸磔刑
七. 本懐成就
八. 昼夜苦役
九. 被虐道中
十. 身替拷問

一．全裸殉教

九州の北端にある港町。万葉の時代から朝鮮渡海の根拠地として栄え、鎖国令が出されてからもさびれることはなく、大坂や江戸から長崎へ向かう航路の中継基地として、九州諸国の産物の出荷拠点として、いっそうの発展をとげてきた。港を取り囲んで並ぶ蔵屋敷には、地元の大店にまじって大坂からの出店も散見される。

春を迎えて穏やかになった海を千石船が行き交い、大通りは大八車の往来で人が歩くのも危険なほどになり、口入屋の軒先は日銭を稼ぎに集まった人足であふれかえる。それが、この港町の日常のはずであった。

しかし、この日はまるで様子が違っていた。大通りから喧騒が絶えている。人出が少ないのではない。いつにも増して、ゆうに千人は超える人々が大通りにはいた。彼らは道に沿って人垣を作り、じっと立っているのだった。

群集は、祭礼の行列を待っているかのようにも見えた。しかしそれにしては、人垣に華やかさがなかった。いなせな法被姿の若い衆も、艶やかに着飾った乙女たちも、そこには

いなかった。男たちは――そう、人垣の中に女子供の姿は見えなかった。男たちは仕事着や普段着のまま、ここに集まっているのだった。
やがて。二町ばかり先の曲がり角で、人垣が揺れた。
「来た……」
「あそこだ」
六尺棒を前に構えた下役人が人垣を両脇へ押しつけていく。高札を掲げた下役人が警護の役人に挟まれて道の真ん中を歩いて来る。その五間ばかり後に、前後をものものしく役人に固められた馬が姿をあらわした。
人垣がどよめく。
馬の背に掛けられた筵の上には、縄で厳しく縛された女囚が乗せられていた。女囚は素裸だった。四十には間があろうか。菱縄にくびり出された豊満な乳房は無論、肉付きの良い太腿も尻も、なにもかもが衆目に晒されていた。わずかに開けた二階の雨戸越しに盗み見ている者からは、股間の黒い翳りさえも見えただろう。
処刑に先立って市中を引き回されるのは、親殺しや主殺し、火付けといった重罪人にかぎられている。それでも、裸で引き回されることはない。脇腹から槍を突き通すために囚

衣の前を絞られて胸が露出されるのは磔柱に掛けられるときであり、その際にも断末魔に見苦しい様を見せぬようにと、女囚の裾は別の縄で縛るほどだ。女性の下半身の露出への禁忌が厳しいこの時代に、全裸で引き回されるとは、この女囚はどれほどの重罪を犯したのだろうか。

下役人の掲げる高札には、つぎのように墨書されていた。

網元　浜永嘉助之妻　志津儀
右の者　切支丹を棄教せぬ故を以って
海磔に処するもの也
社寺方奉行　佐伯勘解由

切支丹として断罪された者には、他の罪では考えられない特権が与えられている。裁きがくだった後でも、たとえ磔柱に掛けられてからでさえ、ただ一言、棄教すると誓えば赦免されるのだった。その一方で、棄教を迫る手段に制限はなかった。

通常の吟味は、その手順が法度で細かく定められており、残虐な拷問は厳しく禁じられ

ているのだが、切支丹だけは吟味法度の埒外に置かれていた。女囚を全裸で引き回そうが、生爪を一枚ずつ引き剥がそうが、お構いなしなのだった。

とはいうものの、女囚の身体に残された拷問の傷痕は、それほど多くはなかった。

背中から臀部にかけて赤黒い笞痕が無数に走り、太腿には内出血のどす黒い染みが広がっている。脛に刻まれた幾筋もの深い傷は、十露盤責めによるものだろうか。右の乳房には火傷らしい引きつれが残り、股間からは月の障りとも思えぬ鮮血が今もわずかずつ流れ出ている。

それらは、この女囚に加えられた責めが、けっして手ぬるいものではなかった証である。しかし、かつての切支丹に対する拷問は、この程度ではすまなかったのだ。耳を切り落とし、鼻を削ぎ、指を一本ずつ切り落としたという。背中を断ち割って硫黄の混じった熱湯を注いだとも伝えられている。それを拷問と呼ぶのであれば、この女囚への仕置きは、せいぜいが折檻とでもいうべきものであった。

それには、三つの理由があった。

ひとつには、百年の余も続いた太平に人心が狎れたことによる。酸鼻をきわめる拷問は、いかに相手が切支丹とはいえ、庶民の眉をひそめさせ、ひいては政道への不信を植え付け

かねない。
為政者が切支丹の思想を、すくなくとも理屈のうえでは理解するようになったことも、苛烈な拷問を手控えさせた理由だった。切支丹にとっては、迫害こそが天国への近道なのである。かりそめの存在でしかない肉体を支配する地上の君主から迫害を受ければ受けるほど、それは永遠に続く魂の主人である神に忠誠を誓うことになるのだ。切支丹を棄教させるには心を攻めねばならない。信じていた神に裏切られたと思わせねばならない。
肉体への拷問がまったく無意味というわけでもない。生半可な信者を転向させるには、それなりの効果もある。だから、この女囚には型どおりの責めがおこなわれ、筋金入りの切支丹だと判断されて、それ以上の拷問は手控えられたのだろう。
それにしても、志津が捕らえられてから今日まで、ひと月足らずでしかない。信者の心を攻めるには、あまりに短い期間ではないだろうか。
「お志津っ！」
場違いな紋付袴に身を固めた男が、人垣を割って飛び出した。下役人の手をくぐり抜けて、女囚の足に取りすがった。
「お志津、後生だから考え直してくれ。子供たちが可哀そうだとは思わないのか」

男は女囚の亭主、浜永嘉助だった。
「狼藉者ッ」
下役人が二人がかりで嘉助の肩を取って、女囚から引き剥がそうとした。
「よい。捨て置け」
行列最後尾の馬上から検視役の声が飛んだ。はっと振り返った下役人に検視役が顎をしゃくった。
自由になった嘉助は、あらためて女房をかき口説いた。
「まだ間に合う。おまえさえ心を入れ換えてくれたら、お召し上げは免れるんだ。おまえは正助に船子をさせるつもりか。それでも正助は男だ。なんとかなる。しかし、志満はどうなる。嫁入り道具も満足に揃えてやれなくなるんだぞ。頼む、思い直してくれ」
嘉助は女房に向かって土下座までした。
しかし志津は、自分の亭主を哀れむような眼差しで見下ろすばかりだった。やがて、きっぱりと首を横に振った。
「分限者がパライソへの門をくぐるのは、馬のように大きな獣が針の穴をくぐるより難しいと申します。いま財産を失うことは、とても幸せなことです。この世での苦労はキリシ

ト様が百倍にも増して報いてくださるでしょう」
志津は天をあおいで、小さな声で祈りを唱えはじめた。現世のしがらみを振り捨てた彼女の眼差しは天国への道に目を据えていた。拷問で痛めつけられた肌にうっすらと赤みが差し、至福の表情がゆっくりと面にのぼってくる。
「行けい」
検視役が鋭く声を発した。幕間劇に目を奪われていた下役人どもが、はっと我にかえって人垣を押し戻した。女囚を乗せた馬が轡を取られて、歩みを再開する。検視役が通り過ぎると人垣は崩れて、引き回しの行列を追い始めた。土下座したまま取り残された嘉助が、息子らしい若い男に抱え起こされた。二言三言、疲れ果てた顔で息子と言葉を交わす嘉助。やがて二人は、いずこともなく姿を消した。
――これが、女囚への拷問にいささかなりの手心が加えられたかもしれない三つ目の理由。そして処刑が急がれた理由であった。
この藩では、切支丹を出した家は財産の一切を没収されるのだった。
市中引き回しの行列は大通りを抜けて海岸に出ると、港とは反対の方角へ道を折れた。突堤に囲まれた港の外は砂浜になっている。砂浜に組まれた竹矢来の中で、女囚は馬から

下ろされた。
いったん縄をほどかれると志津は、砂浜に横たえられた磔柱にみずから進んで横たわった。腰と胸が固縛され、両腕が広げられて横木に張り付けられる。女囚は十字架に掛けられるのがふつうだが、志津に用意された磔柱は足のところにも横木があるものだった。足首を両側に引っ張られたときだけは、さすがに志津も「あっ」と声をあげたが、無駄なあらがいはしなかった。
大の字に張り付けられた志津を見下ろして、検視役が型どおりに訊ねる。
「この期に及んでも、まだ邪教を捨てぬつもりか」
「キリシト様の教えは邪教ではありません」
志津は役人を見上げてきっぱりと答えた。
「やむを得ぬな。この女を海磔にかけよ」
下役人たちが磔柱を抱えて海に浮かべた。波打ち際から十五間（約三十メートル）ばかりのところに低い矢倉が組まれている。磔柱はそこまで引かれてから、根元に大きな岩を結びつけられた。斜めに立ち上がった磔柱が三人がかりでまっすぐに起こされ、矢倉の上から大槌で海底に打ち込まれた。

志津の身体は腰までが海に浸かった。満潮になると、海面は顎のあたりまでくる。すこしでも波が立てば頭も浸かるが、すぐに溺れ死ぬことはない。
「邪教の信者に申し渡す」
検視役が波打ち際まで来て声を張った。
「邪教を捨てる気になったらば、いつでもそう申し出でるが良い。お上は慈悲をもっておまえをご赦免にするであろう。家財召し上げも沙汰止みと致す。波に洗われながら、とくと考えよ」
検視役が引き上げると、ただちに竹矢来は取り壊された。見物人が、どっと波打ち際まで押し寄せた。そのほとんどは、若い男たちだった。

砂浜の後ろにある松林の中から、ひとりの少女がこの処刑の一部始終を見守っていた。歳は●五、六だろうか。ただ頭の上で丸めて櫛で留めただけの髪型といい、膝頭までが剥き出しのみすぼらしいお仕着せといい、どう見てもそれは下女の姿だった。
松の幹にすがった少女の膝は、がくがく震えていた。震えながら、目だけは大きく見開かれて磔柱に吸い寄せられている。

少女の背後に、若い男が足音を忍ばせて近寄った。少女を松の幹ごと抱きすくめて、ついっと尻を撫であげた。
「きゃあっ！」
少女は暴漢の手からのがれようとしてもがいた。
「いまさらケツをさわられたくらいで騒ぐ玉じゃないだろう」
若い男が少女の耳元でささやいた。
はっと動きを止める少女。相手が誰だかわかった。少女は身体の力を抜いて、男にしなだれかかった。
「こんなところで油を売ってちゃ、また御内儀さんに折檻されるぜ。女だてらに磔見物とは、いい度胸だが……それとも」
男の右手が少女の襟から中にすべりこんだ。
「ああやって大股開いた素っ裸を、おまえも皆に見てもらいたいのか。え？　淫乱小町のお香世ちゃん？」
されるがままに、香世は胸を揉まれていた。男の左手が裾を割っても抵抗しなかった。どころか、男が悪戯しやすいように、わずかだが脚を開きさえした。

「お願いだから、御内儀さんには言いつけないでくださいね。茂助さん」
指の動きに合わせて、媚びるように尻を男に押しつけながら香世が懇願した。
「黙っていてはやるが――おまえのことになると妙に勘が鋭いからなあ」
とどめを刺すように中指を突きたてて少女に甘い息を吐かせてから、五助は身をはなした。
「いつまでも油を売ってないで、早く戻るんだぜ」
しどけなく乱れた着物のまま松の幹にもたれて茂助を見送っていた香世だが、男の姿が見えなくなると、しゃきっと身を起こした。唇を引き結んで、手早く着物の前を直す。そうして、今いちど磔柱を見つめる。膝の震えは止まっていた。
香世は磔柱に向かって会釈をしてから、町へ引き返していった。

裏道づたいに、香世は小倉屋の勝手口へ戻ってきた。音を立てないように木戸を開けて、すばやく中へはいった。しかし、無駄な努力だった。
「御内儀さん、戻りましたよ」
勝手口を見張っていた女中が大声を張り上げた。

一瞬、香世は女中を睨みつけたが、すぐに表情を消した。御内儀の梅香が縁側に姿を見せるなり、その足下に土下座をした。
「自分が何をしたかはわきまえているようだね」
機先を制されて鼻白んだ梅香だったが、せいぜい嫌味ったらしく香世をなじった。
「いったい、半日もどこで遊び惚けていたんだい？」
「志津小母様を見送ってきました」
香世は事実を素直に告げた。小母様とあえて言ったところに、かすかな反抗がこめられていた。罪人とはいえ、網元の御内儀である。廻船問屋の下女風情が「小母様」と親しく呼べる相手ではない。
「切支丹なんかと関わりを持つんじゃないよっ！」
梅香の注意はそちらに奪われていた。
「昔は昔、今は今なんだからね」
その言い方からすると、香世の反抗にも気づいていたのかもしれない。
「ちょっと目を放すと、すぐこれだ。今日は手加減するわけにはいかないよ。立って尻を捲くるんだよ」

香世は立ち上がると、言われたとおりに自分の手で裾を捲くった。裾を帯に絡げてから脚を開き、前かがみになって足首をつかんだ。それが、折檻を受けるときの決まり姿だった。

梅香の声を聞きつけて、手代や丁稚が五、六人ばかりも集まってきた。茂助の姿もあった。男どもの目は、白桃のような●六歳の尻に吸い寄せられている。仕事に戻れとは、梅香は言わなかった。

「ほんとうなら、おまえは一生を牢屋で過ごすところだったんだよ。旦那様のおかげで、人並みの暮らしができるんじゃないか。それを忘れるんじゃないよ」

「はい。旦那様にはほんとうに良くしていただいて……」

はっと口をつぐむ香世。自分の言葉がとんでもない皮肉になっていることに気づいたのだ。

梅香も気づいた。たちまち顔色を変えて足袋のまま裏庭に駆け下りると、軒下に積んである薪を手に取った。もう物も言わずに、薪を香世の尻に叩きつけた。

ばしっ！

香世の尻がひしゃげる。

「ひ、ぐっ……」
歯を食いしばって悲鳴をこらえる香世。それを強情と受け取ったのか、梅香はますます血相を変えて香世を打ちのめした。
香世はよろめきながら、必死に足を踏ん張っている。こらえきれずに倒れたらどうなるか。去年の秋に一度だけ、香世はそれを味わっていた。仰向けに押さえつけられて、胸と腹を打たれた。あのときは布団叩きだったから、痣だけですんだ。もし薪で打たれたら、二、三日は起きあがれなくなるかもしれない。
香世は涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら、癇癪まかせの折檻に耐えていた。
「咎人の娘だけあって、強情だったらありゃしない」
ついに梅香が薪を投げ捨てて腕をさすった。
「今日は一日食事抜きだよ」
使用人を店へ追い立てると、梅香は奥へ引っ込んだ。
裏庭にひとり取り残された香世は、裾をおろすこともせずに物陰にしゃがんだ。手探りで、尻に刺さった薪のささくれを抜いていく。すでに香世の涙は乾いていた。
やがて裾をおろして立ち上がった香世は、折檻に使われた薪を拾い上げて、元の場所に

積んだ。そして、薪小屋から新しい束と斧を運び出した。男手に不足のない家なのに、薪割りは香世の仕事にされていた。
薪割りの後は内風呂の掃除と水汲み。少女ひとりでするのだから重労働だった。
昼餉を抜かれたせいで時間はじゅうぶんにあった。与えられた仕事を片付けてからひと休みすると香世は台所へ行って、自分は食べさせてもらえない夕餉の支度を手伝うのだった。
女たちは概して香世につらくあたった。食事を抜かれてきつい仕事を与えられた育ち盛りの少女に、ひと握りの飯を手渡してくれる者はいなかった。それどころか、香世が盗み食いをしないかと、厳しい監視の目を光らせているありさまだった。
何かといえば食事を抜かれているにもかかわらず、香世が乙女らしい張りのある肌をたもっていられるのは、男たちのおかげだった。男たちは人目を盗んでは香世を呼び止め、握り飯や水菓子、たまには飴なども香世に恵んでくれた。それを頬張っているあいだ、香世の身体には男どもの指や舌が這いまわっているのだが。
『淫乱小町の香世』とは梅香が意図的に流した噂だが、そう言われても仕方のない振る舞いが香世にあるのも事実だった。

二．淫肉奉公

店を仕舞ってから夕餉が終わると、使用人たちにひと時の休息が与えられる。といっても、遊びに出歩く銭があるわけもない。丁稚たちは年配の手代から読み書き算盤を教わり、女中は女中でささやかな習い事で時をついやす。輪番で銭湯へ行く者もいた。

灯明を節約するために早々と寝静まる商家の中で、主人の部屋にだけはまだ明かりがついていた。番頭がつけた帳簿と、大福帳、荷受証文、荷送証文、日払いの書付などを照合しては、ときおり別の小さな帳面に数字を書き付けていく。そうして小半時。最後に算盤をはじいて、長兵衛はふんと鼻を鳴らした。今日いち日に動いた銭から掠め取れた内緒金は三両にも満たなかった。

「率の悪い商売だ」

ひとりごちてから、長兵衛は裏帳簿を手文庫の二重底に隠した。

「風呂へいく」

隣の部屋で針仕事をしている梅香に声をかけてから、立ち上がった。隣の部屋からの返

事はない。
五右衛門風呂でゆっくり温まってから、長兵衛は明り取りの窓へ向かって呼びかけた。
「香世、はいっておいで」
「はあい」
竈口にひかえていた香世から、嬉しそうないらえが返ってきた。
ほどなくして香世が風呂場へ姿を現わした。一糸まとわぬとはいうが、ほどいた髪を後ろで縛った紐だけが、香世の身につけている物だった。
数えで●六歳を迎えたばかりにしては艶めいた裸身が、薄暗い風呂場に白く浮かび上がった。乳房は少女の掌では隠しきれなくなっているし、小ぶりの尻も十分に丸みをおびていた。なにより、腰のくびれには熟れた風情さえただよっていた。
「ちょっと後ろを向いてみろ」
簀子に座ろうとしていた香世に長兵衛が声をかけた。
香世は素直にしたがう。梅香の手ひどい折檻で痣だらけになった白桃が、長兵衛の顔の高さにきた。
「これは痛かったろうな」

いたわるような言葉を吐きながら、むんずと白桃を鷲掴みにする長兵衛。
「ひっ……ああん」
一瞬の悲鳴に鼻声がかぶさった。
「まだ棘が刺さっているじゃないか」
長兵衛は乱暴に尻を揉みながら、ささくれを何本か抜き取った。長兵衛の手が尻のあいだから前へまわった。
「こちらには棘がないな」
芋虫のような指が、少女の無毛の股間を撫であげ、柔肉をつまんだ。
元来、少女は無毛の体質ではなかった。昨年の秋に、香世は店から逃げ出すという騒ぎを起こしていた。その詫びとして頭を丸めるかわりにと、長兵衛に剃られたのだった。それ以後は毛抜きを与えられて、自分の手で処理をさせられていた。
ひとしきり少女を啼かせてから、長兵衛はひっくり返した洗い桶に座った。
香世は正面に跪いて、両手で長兵衛の股間を洗った。少女の指に絡みつかれて、たちまち長兵衛の逸物が猛り立った。顔を赤らめることもなく、香世は手拭にシャボンを擦りつけて泡立てると、長兵衛の腕を取って洗った。胸と腹を洗い終えると、香世は腰を浮かし

た。
「お背中を洗わせていただきます」
香世は脚を大きく開いて、長兵衛にまたがった。この所作も、出奔騒ぎを起こしてからこっち、長兵衛に仕込まれてきたことのひとつだった。何をしでかすかわからない者に背中を向けられないという理屈がつけられていた。
香世はこの夜、長兵衛に強いられている以上の挙に出た。
「あの……旦那様。お宝棒がつっかえると、うまく洗えないんです」
左手で逸物を握ると、香世は自分の中へそれを収めた。
「お、おっ……おまえ。はしたない真似を……」
言いながら相好を崩す長兵衛。
香世は腰を沈めて長兵衛に抱きつき、両手を背中にまわした。手拭で背中を洗いながら、乳房を長兵衛の胸板に押しつけ、尻を前後に揺らす。
「う、う……待て」
あわやというところで、長兵衛は香世を突きのけた。
「いよいよ味を覚えてきよったな。あとでたっぷり可愛がってやるぞ」

長兵衛は湯をかぶってから、また風呂に浸かった。香世は汲み置きの水で身体を流すことしか許されていない。
「いつものようにして待っておれ」
風呂場を出る香世の背に長兵衛が声をかけた。
香世は身体をぬぐうと、手早くお仕着せをまとった。台所へ行って梅干をひとつ取って、布団部屋へ戻った。忍んでくる長兵衛のために布団を敷いてから、また着物を脱いだ。梅干をつぶして女陰に押し込み、落とし紙を唾で丸めたものを、その上へ詰めた。子を孕まぬようにと、長兵衛に仕込まれた技だった。男に抱かれる用意を整えて、香世は布団の横に正座した。
「ちょうど一年」
まもなくその上に押し倒される破れ布団を見つめて、ぽつんと香世がつぶやいた。
ぼた、ぼたっと、畳が湿った音を立てた。

一年前。この廻船問屋は大倉屋の看板を掲げていた。主人は大倉屋治平。香世は、そのひとり娘だった。

いきなり捕縛吏が踏み込んできて、両親は投獄された。蔵から抜け荷の品が幾つも見つかって、大倉屋はお取りつぶし。両親は罪人として炭鉱へ送られた。大倉屋の身代は現銀がすべてお召し上げとなったが、廻船問屋の株と家屋敷は香世の叔母である梅香が嫁いだ先へ下げ渡しとなった。梅香の亭主の長兵衛は十艘の伝馬船を抱えているだけの小商人であったから、たいそうな出世といえた。先代の商いを引き継いだが身代は小さくなったという意味か長兵衛は小倉屋と屋号を改めた。

香世には牢内留め置きの沙汰がくだされた。引き取ると名乗り出る者が現われるまで、無期限に牢へ入れられるという処置だった。親戚同士が相談して誰かが引き取るのが通例だが、何年も留め置かれる者も皆無ではない。香世の場合は、沙汰と同時に長兵衛が名乗り出たので、実際に牢へ入れられることはなかった。

最初のうち、香世は掛かり人として扱われていた。丁寧に扱われている居候といったところだ。長兵衛が引き連れてきた連中はともかく、大倉屋の時から居残っていた使用人たちは香世に同情を寄せて、何くれとなく親切にしてくれた。

香世の運命が本格的に狂い始めたのは、皮肉にも、満で●四歳の誕生日を迎えた水無月（六月）のことだった。

夕刻、香世は長兵衛の供を言いつけられた。行った先は料亭だった。堅気の女性、ましてや未婚の娘が来るような場所ではないのだが、香世は叔父を疑っていなかった。
香世は二人の役人に引き合わされた。二人は山方を勤めていた。
「おまえも両親の様子を知りたいだろうと思ってな」
城への報告に帰ってきたところを、長兵衛がわざわざ招いたのだった。香世は長兵衛と二人の役人に頭を下げた。
「炭鉱はきつい所じゃ」
橘と紹介された年配の役人が、平伏している香世に向かって言った。
「露天掘りじゃ。この季節にはお天道様に焼かれて日に何斗も汗をかく」
鈴木という若い役人が、炭鉱の重労働を事細かに語った。
「水を飲み、塩の塊をかじる。よほど頑健な若者でも十年せぬうちに腎をやられる。掘り返した石炭の粉を吸い込んで、それが肺に溜まって胸もやられる」
「おなごは掃除洗濯や賄い仕事だから、その心配はない」
「しかし、数が少ない。街で売れなくなった商売女どもが何人か来ておるが、まるで足りぬ。おまえの母親はまだ三十路。しかもなかなかの美人じゃな。毎晩四、五人は相手をせ

ねばならぬ」
「えっ……？！」
はっと香世が顔を上げた。聞き違いかと思った。
「商売女は気ままに休めるが、囚人はそうもいかぬ。孕んでは流産の繰り返しで、やがては命取りになる。悪い病をうつされる者もおるしな」
母が夜毎に何人もの男の慰み物にされている。そう聞いただけで、香世は気を失いそうになっていた。
「大方の囚人は、そういうことじゃ。十年長らえる者は、ほとんどおらぬ」
「しかし、別に小屋を与えられて苦役を免除されておる囚人も、おらぬではない」
「娑婆に残った家族の心がけ次第じゃがな」
そう言って、橘某が長兵衛と香世の顔を順番に見た。
「心がけとは、どういうことでございましょうか」
長兵衛が訊ねる。
「商人のくせに、そんなことも分からぬのか。地獄の沙汰も何とやらではないか」
「あ、これは失礼いたしました」

芝居がかって頭を叩く長兵衛。声を低くして続ける。
「商人ですので、不躾にお訊ねしますが。如何ほど必要でしょうか」
「男のほうは我らが目こぼしすれば済むが、女はなあ。売れっ妓を引かそうというのだ。人足頭からお代官まで、総花じゃな」
香世には理解できない言葉もあったが、意味は分かった。
「最初の挨拶に百両。以後も盆暮の付け届けに五十ずつはいるな」
百両。それも毎年。香世も商人の娘である。今の小倉屋の身代ならけっして捻出できない金額ではないと、見当がついた。もっとも、大倉屋の商いは受け継いでも現銀は没収されている。叔父が資金繰りに苦労しているのを、香世はその目で見ていた。大倉屋の頃に比べて、藩へ納める運上金が三倍になったのも知っていた。それでも、百両は商いが立ち行かなくなるような額ではない。
ところが、長兵衛は難しい顔をして腕を組んだ。
「ふうむ……百両」
そのまま黙りこんでいる。
香世は信じられない思いで叔父を振り返った。

香世の母は、長兵衛の女房の妹ではないか。身内を助けるのにわずかの金を惜しむ心が理解できなかった。それに、元をただせば小倉屋の財産は大倉屋のものだったのだ。しかし香世は、叔父をなじれる立場にはなかった。

「お願いです」

香世は叔父に向かって額を畳にすりつけた。

「どうか、両親を助けてやってください。わたしにできることは、なんでもお手伝いします。父に仕込まれましたから、帳面付けくらいはできます」

「わしとしても助けてあげたいのは山々だが……ふうむ」

沈黙がつづけば、香世の考えが向かう先はひとつだった。

「もし、わたしでお役に立てないんでしたら、廓に売ってくれてもいいです。そのお金で、両親を助けてやってください」

もしも長兵衛が香世の身元引受人になっていなかったら、とっくにそうなっていたかもしれない。罪人の子を雇ってくれる奇特な人間は、そう多くない。たとえ正業につけたところで、世間の風当たりは冷たい。●六歳の小娘が人並みの暮らしを望めば、行き着く先は知れている。

「なにも、今すぐ決めなくてもよいではないか」
橘某がとりなした。
「われらが山へ戻るのは十日後だ。その気になったら、使いをよこせ」
「せっかくお招きにあずかったのですから、ここは山海の珍味をご相伴といきましょう」
幇間のような科白を吐く鈴木。
長兵衛が手を叩くと、料理と酒が運ばれてきた。
それから半時あまり、饗宴がつづいた。料理を平らげたのはふたりの役人で、長兵衛はなぜか酒食をひかえている感じだった。もとより、香世は箸をつける気にもなれない。言われるままに酌をした。役人に何か訊ねられたが、それもはっきりとは覚えていなかった。
そうして役人を送り出してから、香世は長兵衛とともに元の座敷に戻った。
「百両という金子の価値は、おまえにも良くわかっているね」
そう切り出されて、香世は「はい」と答えるしかなかった。十両盗めば首が飛ぶ。小倉屋にいる四十人ほどの使用人の年間の掛かりが、番頭への給金を除けば百五十両だった。
「ほんとうになんでもする覚悟があるんだね」
「廓に売り飛ばされてもいいと言った言葉も嘘じゃないね」

いったい、叔父は自分になにをさせようとしているのか。「はい」と答えながら、香世は不安になってきた。それでも、まさかという思いのほうが強い。いくら血がつながっていないとはいえ、叔父と姪の間柄だ。考えられないことだった。

その考えられないことが起こった。長兵衛が立って隣の間との襖を開けると、そこには夜具が敷かれていた。

「そこに寝なさい」

「そんな浅ましいこと……人の道にもとります」

「罪人の娘が、いっぱしの口を利くんじゃない」

それが長兵衛の返事だった。

「妾を囲えば、家だの手当てだので、年に何十両もかかる。その分をおまえにくれてやろうと言うんだ」

長兵衛は冷ややかに香世を見下ろしていた。自分から手を出そうとはしない。年端もいかない義理の姪を手篭めにするのは、さすがに気が引けるのか。それとも、絶対に思いどおりになるという自信の現われだろうか。

ひと呼吸、ふた呼吸。肩で息をしながら、香世は夜具を見据えていた。

やがて、香世は蒼白の顔で立ちあがった。夜具の横で腰を落として、掛け布団をはいで横になろうとした。
「着物のままで寝る作法があるか」
血の気のうせた顔に、さあっと赤みが走った。それでも、帯留めをはずして帯をといた。気丈に立ち上がり、振袖を肩から抜いて枕元の衣文掛けに通した。足袋や小物もきちんと揃えてから、香世は襦袢姿を夜具の上に横たえた。
「聞き分けのいい娘だね」
別の座敷からもれてくるさんざめきに、あわただしい衣擦れの音が重なった。きつく閉じたまぶたの向こうが、すうっとかげった。長兵衛の酒臭い息を香世は間近に嗅いだ。
腰紐がほどかれ、長襦袢の前がはだけられた。あとは、薄い肌襦袢しかない。それもはだけられて――男を知らぬ肌を夏の風がすっと嬲った。
「あ……」
いっそう身体を硬くする香世。全身が小刻みに震えている。
「ひゃあっ！」
乳房を撫でられて香世は小さな悲鳴をあげた。他人に聞かれてはという自制が無意識に

はたらいていた。
両の乳房を弄ばれる香世のまなじりから涙があふれた。
ひとしきり乳房を蹂躙した長兵衛の手が、香世の内腿にかかった。左右に割られまいとして、香世は両膝に力をこめた。
ふっと長兵衛の手がはなれた。
「父親を見殺しにするのか？　母親が慰み物にされてもいいのか？」
耳元にささやかれて香世はぴくっと肩を震わせた。
「おまえだって、女郎になって何十人も見知らぬ男に抱かれるよりは、わしひとりのほうが良いだろうに」
香世の身体から力がぬけた。
「きゃあああっ！」
足首を高く持ち上げられて、香世は金切り声をあげた。
肌襦袢の端が口に押し込まれた。
「騒げば人が来るぞ。見られてもいいのか？」
香世は弱々しく首を横に振った。

「それなら、おとなしくしていろ」
膝を左右に大きく割り広げられても、香世は両手で顔をおおって耐えるしかなかった。あおむけのまま身体を二つに折られて、香世は背中の痛みにうめいた。
長兵衛は左腕で香世の両脚を押さえこみ、右手を女陰にのばした。淡い春草につつまれた花弁を太い指でなぞっていく。
「う……くう……」
口に押し込まれた薄布を噛みしめて、香世はおぞましい感触に耐えた。香世は全身に鳥肌を立てながら脂汗をにじませていた。
やがて、香世の意思とは関係なく、湿った音が聞こえ始める。
長兵衛が香世にかぶさって、足首を両肩にかついだ。香世の腰が浮き上がる。その中心に長兵衛の剛直があてがわれた。
じわっと腰を沈める長兵衛。
「い、痛い……」
香世は腰を引きながら肩でいざった。香世の身体がすこし動いた。それを追う長兵衛。再び香世が逃げる。それを繰り返すうちに、香世は布団からずり出ていた。

「ええい、拉致が明かぬわい」
不機嫌そうな声を出して、長兵衛は香世から身体をはなした。
部屋の隅まで追い詰めれば、目的は遂げられる。しかしそれでは、長兵衛も動きが制限されてしまう。いっそ縛りあげて香世の自由を奪うという手もあるが、長兵衛もそこまで非道ではなかった。いや、いっそう非道だったというべきか。
長兵衛は畳の上に放ってある着物から煙草入れを取り出した。蓋は開けずに底をずらして、小さく刻まれた葉を煙管に詰めた。
行燈の火で吸いつけて、煙管を香世に渡した。
「吸ってみな。気持ちが落ち着く」
煙草なんか、そばへ寄っただけでも煙たくて気分が悪くなる。それでも香世は、片手で肌襦袢の前を押さえながら煙管を受け取った。吸い口をくわえただけで、口いっぱいにヤニの臭いが広がった。
目をつぶって、おそるおそる息を吸った。とたんに噎せて咳きこんだ。
「それくらいでは駄目だ。思い切って大きく吸いこめ」
咳がおさまると、頭が痺れた感じになってきた。なにも考えられなくなってきた。香世

は長兵衛に言われるままに、煙を胸いっぱいに吸い込んだ。また咳きこみながら、なんだか浮き立つような気分になってきた。
「どうだ。気持ちが良くなっただろう」
「はい」
誰かが自分の口を使って喋っているような感じがした。
「もう怖くないだろう。襦袢も脱いで、香世の身体をとっくり見せておくれ」
香世は長兵衛の言葉に操られたように、肌襦袢を脱いだ。なぜか、ちっとも恥ずかしくなかった。脚を開いて膝を立て、腰を浮かすような仕草さえしてのけた。
その後のことを、香世は夢うつつにしか覚えていない。それでも、長兵衛に貫かれたときの痛みだけは、はっきりと覚えている。
その三日後の深夜、香世にあてがわれていた小部屋に長兵衛が忍んできた。
「まだ百両の付け届けはしていないんだよ」
耳元でささやかれては、香世にあらがうことなどできるはずもなかった。
ひと月もしないうちに、ふたりの仲を梅香が勘付いた。梅香は亭主をなじったりはしなかった。ただ、香世の小部屋を取り上げ、布団部屋で寝起きするように言い渡しただけだ

った。
何も言われなくても、香世にも理由はわかった。ありがたいとさえ思った。使用人が隣で寝ていれば、いくら長兵衛でも無体はしないだろうと考えた。
それでも長兵衛は夜這いをかけてきた。
梅香の報復は、再び香世へ向けられた。薪割りや水汲みのような力仕事を、すべて香世に押し付けた。些細なしくじりを言い立てて、手ひどい折檻を加えた。
女房の怒りが香世に向けられているのをこれ幸いとばかりに、長兵衛は知らぬ顔を決め込んでいた。
ひとつ屋根の下の出来事である。香世の部屋へ通おうが布団部屋へ忍び込もうが、使用人たちが気づくのは時間の問題だった。そうなれば、いくら厳重に口封じをしたところで、世間にまで知れ渡るに決まっていた。事実そうなったのだが、噂はひどくねじ曲げられたものになっていた。
香世のほうから長兵衛をたらし込んだのだとか、小倉屋に代替わりしたときに暇を出した手代の誰某は香世と出来ていたとか、香世の男漁りがひどいので使用人たちの目が行き届くよう布団部屋へ押し込み、夜遊びが出来ぬほど疲れ果てるよう力仕事をさせていると

か。
出所は分かりきっていた。根も葉もないことだと思っていても、繰り返されれば信じる者も出てくる。淫乱小町という仇名が店の外でも聞かれるようになるまで、たいして日にちはかからなかった。
　そうなると、世間の人情は冷たい。非難と侮蔑は香世の身に集まった。長兵衛とて誉められるはずもなかったが、妾も蓄えずに商いに励んだ挙句を小娘に付け込まれた甲斐性なしと、軽く見られる程度にとどまっていた。
　身に覚えのない醜聞に、香世は黙って耐えた。醜聞が広まっても続けられた長兵衛の狼藉にも、つぎつぎと増やされる仕事にも、梅香の悋気混じりの手ひどい折檻にも耐えた。年に百両もの大金を都合して、それを役人に付け届けるには、ほかに術はないと香世は観念していたのだろう。

三　殉難志願

廊下がかすかに軋み、襖の隙間から手燭の灯りがこぼれた。襖が開くと、香世の裸身が明々と照らし出された。

長兵衛は手燭を行燈の上に置いた。灯りを消そうともしない。

長兵衛は褌をはずすと、まだ元気のない逸物を香世の顔に突きつけた。香世は長兵衛の尻にしがみつくようにして、それを口に含んだ。淫らな音を立ててしゃぶりながら、右手でそっと玉袋を揉んだ。

この時代、吸茎などという所作は、よほど淫蕩な女でも嫌がった。まっとうな遊郭でそんなことを求めようものなら、たちどころに叩き出されること必定だった。長兵衛は年端もゆかない姪にそんな破廉恥なことを要求し、そして香世も嫌がるそぶりは見せなかった。いや、長兵衛を猛り立たせようと、積極的に応えていた。

たちまち長兵衛の逸物が太く硬くなって、香世の喉を突き始めた。五十歳が近いとあっては天に向かってそびえ立つほどではないが、香世を呻かせるにはじゅうぶんだった。

「四つん這いになれ」
香世の唾で濡れたそれを、長兵衛はしゃにむに背後から突き入れた。香世のたおやかな乳房を揉みつぶしながら、ゆっくりと抽挿を始める。
「あ、ああ……あんんっ」
いつもは隣の耳をはばかって声をあげない香世が、小さいながらも鼻声をもらした。そうして、腰を前後に揺すった。つられて、長兵衛の動きも激しくなった。
あっという間に、長兵衛は果てた。
ぐったりと突っ伏した香世から身をはなすと、長兵衛は跡始末もそこそこに立ち去った。足音が聞こえなくなると同時に、香世がしゃきっと身を起こした。瞬前までの乱れぶりが嘘のような身ごなしだった。太い耳掻きのような棒を女芯の奥深くに突っ込んで、自分で詰めた物を掻き出していく。
それが済むと肌襦袢を着て、しかし香世に与えられた破れかけの夜具に横たわろうとはしなかった。お仕着せを身にまとって、そっと布団部屋を出た。
台所へ行って、手早く握り飯を作り、竹の水筒に酒を詰めた。それらの品を洗い桶に詰めて、つぎは裏庭へおりた。薪小屋の奥に隠してあったぼろ布のかたまりを懐へ入れた。

音を忍ばせて裏木戸を開けると、月明かりの下を海岸へ向かって小走りに急いだ。
香世は港とは反対の方角へ道を折れ、突堤に沿って砂浜を波打ち際へ下りた。
「あんなに遠い……」
磔柱を透かし見て、香世は絶望の声をもらした。突堤の先端には夜を走る船の道標として灯明台が設けられている。月明かりに加えて灯明台にも照らされて、志津の裸身は暗い海の上にはっきりと浮かび上がっていた。その胸までが海水に浸かっていた。わずかでも早く長兵衛の欲望を吐き出させようとした努力が、徒労に終わろうとしていた。
しかし、これこそは神が少女に与えた唯一の機会なのだ。
香世は、きっと磔柱を見据えた。袂からぼろ布を取り出して開いた。銀細工の小さなクルス（十字架）が、そこにあった。それを首に掛けてから、お仕着せを脱ぎ捨てた。素足になり、突堤に沿って沖へ歩いた。
磔柱の真横まで来た。香世は砂浜を振り返った。磔柱の正面にあたる松林の手前に仮の番小屋が作られていたが、あたりに人影はなかった。囚人を助け出そうという不届き者などいるはずもなかったし、この期に及んで筋金入りの切支丹が棄教を申し出るとも思えない。形ばかりの見張りだった。

香世は突堤をはなれて、海にはいった。洗い桶につかまって泳ぎ始めた。父親の治平は、骨の太い男だった。廻船問屋の娘がまるきり泳げないとあっては水手どもに馬鹿にされると言って、香世が●二歳になるまでは、夏ごとに泳ぎの手ほどきをしていた。

だから、四年後の今でも磔柱まで泳ぎ着くくらい、香世にとってはたやすいことだった――はずだが。水ぬるむ季節とはいえ、海はまだ冷たい。まして夜である。いくらも進まないうちに、香世の歯が鳴り始めた。

寒さは気力で克服できた。しかし、濡れた腰巻が絡みついて、脚の動きを妨げた。香世は片手で腰巻をはずした。あとは肌襦袢一枚である。

泳ぎながら、香世は番小屋を振り返った。まだ気づかれてはいなかった。

香世は四半時ほどで磔柱まで泳ぎ着いた。隣の矢倉に取りすがって、また番小屋を振り返った。人影はない。

磔柱に掛けられた志津は顔をがっくりと垂れていた。気を失っている。

「志津小母様」

香世は大きな声で呼びかけた。

「小母様」

大声で繰り返し呼ばわりながら肩を揺すった。
志津が顔を上げた。ぼんやりしていた目が、香世を認めて大きく見開かれた。
「香世ちゃん！」
「小母様、助けて差し上げることはできませんけれど、せめて、これを」
竹筒の栓を抜いて、志津の唇にあてがった。
志津は首を小さく振って拒んだ。
「パライソへ行くのが遅れるだけです。でも、どうしてこんな無茶を……」
その頃になって、ようやく番小屋からふたりの番人が出てきた。矢倉に取りついている香世を指差してひとりが何事かを叫ぶ。砂浜にどし上げてある小船を、大急ぎで押し出した。
頑なに竹筒を差し出し続ける少女に、あらためて向かい合う志津。月明かりを反射する胸のクルスに気づいて、はっと息をのんだ。
「あなたには、まだ神様のところへ行く資格がないのですよ」
厳しい声で香世を叱った。
「神の教えを、まだまだ習わなければなりません。今は、切支丹であることを隠しなさい」

香世は目をそらせてうつむいた。そのまま押し黙っている。
小船が矢のような勢いで近づいてくる。龕灯の灯りが香世を射すくめた。
「不届き者ッ！　神妙にせい！」
たちまち、香世は矢倉から引き剥がされて捕らえられた。手首を後ろで縛られて、船底に押しつけられた。
「これは……なんちゅう格好じゃ」
海水に濡れた肌襦袢はぴったりと肌に貼りついて、少女の裸身を浮かび上がらせていた。捲くれた裾の下に腰巻はなく、太腿まであらわになっていた。
「泳いできたのか。小娘のくせに大それたことをしでかしたもんだ」
連れ去られる香世を、志津は無言で見送った。切支丹である自分がへたにかばい立てしても香世のためにならないと考えたのかもしれない。
「この娘、切支丹だぞ」
番人のひとりが、胸のクルスに気づいた。
「こんな真似をするんだから、切支丹に決まってはおるが、これは動かぬ証拠だ」
有罪の宣告にもひとしい声を聞きながら、香世は静かに目を閉じていた。

番小屋に連れ込まれて縄をほどかれた香世は、裸身を隠す役には立たない肌襦袢を、それでもきちんと前で合わせて正座した。
「踏み絵に掛けるまでもない。おまえは切支丹に相違なかろう」
「はい、おおせのとおりです」
香世はしずかに答えた。
「おや。どこかで見た顔と思っていたが――おまえ、小倉屋の淫乱小町じゃないか」
「なんだと？　本当か？」
もうひとりの番人が首をかしげた。
「淫乱小町が切支丹だと？　妙ちきりんな取り合わせだな」
この男は切支丹について少しは知っているようだった。切支丹には「姦淫するなかれ」という厳しい掟がある。妾を蓄える習俗が許容されていたら、日本には切支丹信者が十倍以上になっていたはずだとさえいわれている。義理の叔父までたらしこむような娘が切支丹だとは、にわかに信じられないのも道理だった。
「淫らな自分が厭になったんです」
少女が口を開いた。

「こんな汚れきったわたしでも、悔い改めれば神様は赦してくださります」
「ふん、そんなもんかね」
聞き流して、番人は香世を柱のそばへ引き立てた。
「朝までおとなしくしているんだぞ」
香世を小さな焚き火のそばに連れて行き、柱を背負った形で座らせると、形ばかりに手首を縛った。切支丹は逃げないと、この男は承知していた。
いちおうは不寝番ということになっているふたりだが、磔柱の裸身よりは、目の前の少女の半裸に興味があるようだった。だが、悪戯を仕掛けるようなことはなかった。あとで上役に申し立てられては譴責くらいではすまない。肌襦袢が乾いてまがりなりにも衣服の役目を果たすようになってからは、少女への関心も薄れていった。
香世はずっと目を閉じたまま、まんじりともせずに朝を迎えた。もちろん一睡もしていない。それでも、番人たちの無精髭まみれの顔よりは、ずっと生気に満ちていた。
報せを受けた上役が、夜明けとともに番小屋を訪れた。切支丹に相違ないことを本人の口から確かめると、あらためて香世に縄を掛けた。後ろ手に吊り上げた縄を肩越しに腋へ通して、二の腕を絞った。手早く、かつ効率的に容疑者を縛するのが目的の早縄である。

折檻で手首を縛られたことはあったが、こんなに厳しく縛られるのは生まれて初めてだった。香世の口から、かすかな呻きがもれた。

腰縄を打たれて、香世は外へ連れ出された。丈の短い肌襦袢は、歩くと太腿の半ばまでが剥き出しになった。自然と歩幅が小さくなる香世の尻を、役人が縄尻で打った。

「きりきり歩け」

日の出とともに起きて日の入りとともに休むのが庶民の暮らしである。朝早いとはいえ往来に人の目は多い。香世は恥ずかしい姿を衆目に晒しながら牢屋敷へ連行された。もっとも、この後の香世の扱われ方に比べれば、半裸などは恥ずかしいうちにはいらないのではあったが。

この街の差配は三つの奉行所が分担している。町方奉行所と港方奉行所、そして藩全体の宗門を取り締まる社寺方である。切支丹の詮議は社寺方の役目だが、香世が入れられた牢屋敷は町方の差配下にあった。未決囚の数は圧倒的に町方の掛かりが多いので、港方も社寺方も、牢屋敷は間借りしているのだった。

牢屋敷で最初に香世が受けた辱めは身体検めだった。下役人の女房が女囚を素裸にして、

髪の毛の間から女陰の中まで、隠し物を調べるのである。調べるときは役人といえども男子禁制であるはずだったが。
「構わぬ。この娘は切支丹だ。吟味法度の埒外にある」
香世を連行した役人はそう言って、その場から動かなかった。検め役の女たちは憤懣やるかたないといった風情で、仕事に取りかかった。
男の目の前で全裸に剥かれた香世は、神の試練に直面した切支丹として堂々と振舞った。なにひとつ隠そうとしない。
「この娘、かわらけだよ」
無毛の股間を女が指差した。相方は、少女のそこを逆撫でしてきな臭い顔をした。
「それにしては肌が荒れた感じだね。剃るか抜くかしたんじゃないかい」
どうなんだと問われて、香世は素直に答えた。
「自分で抜いています。男って、そういうのが好きみたいだから」
「へん、とんだ阿婆擦れだね。淫乱小町の二つ名は伊達じゃないってことかい」
この女たちに少女への同情がわずかでもあったとしても、この瞬間にそれは消し飛んでいた。香世の尻に残っていた痣の由来を聞いても、鼻で笑っただけだった。

ほかの調べ方もあるだろうに、香世は仰向けで膝を抱いて男を迎え入れるような格好を強いられて、女陰を指で掻き回されたばかりか、菊座の奥まで細い棒で調べられた。
必要以上に長く辱められてから、香世は囚衣を与えられた。灰色の単衣で、作努衣のように脇の紐で前を合わせるのは、帯を与えれば首吊りに使われかねないからだ。同様に簪ももってのほかだった。香世は一本の細紐で頭髪を縛って、後ろへ垂らした。
香世が入れられたのは預かり部屋と称する独房だった。横になることもできない狭い部屋は、捕らえたばかりの被疑者を囚人として入牢の手続きを済ますあいだ留め置く場所だった。と同時に、強情を張るとどういう目にあうか被疑者に思い知らせる役目も持っていた。奥の壁には小窓がうがたれており、そこからは吟味場が覗けるようになっていたのだ。
壁に向かって座らされた香世には、嫌でも吟味の様子が目にはいる。
香世の眼前で展開された最初の光景は、親戚の老人を殺して金を奪った嫌疑をかけられた若い男への吟味だった。
「今日はちょっとやそっとで済まさぬぞ。白状するなら今のうちだ」
若い男への責めは、その言葉どおりだった。三角に割った木を並べた上へ男を座らせ、膝の上に平たい石が積み上げられた。一枚乗せられただけで男は呻き、二枚目で木に血が

にじんだ。白状しないと石はさらに増やされていき、男は脂汗を飛び散らせながら泣き叫んだ。それでも白状しないので、石は五枚まで積み上げられて男は悶絶した。男は顔を水に浸けられて息を吹き返したが、自分の脚で歩けなくなっていた。脛に刻まれた傷の様子では、骨が砕けたかもしれない。男は戸板に乗せられて牢へ戻された。

一部始終を見ていた香世の顔は蒼白になっていた。男の運命は、すぐにも自分の身に降りかかってくる。

男が運び去られるとすぐに、二十五、六の女が引き立てられてきた。吟味役人も代わっていた。

「おまえの悪運も、とうとう尽きたな。性根を入れ換えて、あらいざらい吐いてしまえ。お上にも慈悲はあるぞ」

後ろ手に縛られて役人の前に正座した女は、ふんと鼻で笑った。

「なんのことですかね。あたしはまっとうな芸者ですよ。枕探しなんて、濡れ衣もいいところです」

伝法な口ぶりからしても、本人の言うようなまっとうな人間ではないと、人生経験の少ない少女にもわかる。

「強情を張ると痛い目にあうぞ」
女の肩がはだけられた。二の腕にさらに厳しく縄が掛けられると、肩の肉が盛り上がった。下役人が、そこを笞で叩いた。
ばしんと重い音が響いて、女の悲鳴がかぶさる。竹を割って紐で補強したうえを縛り合わせた棒である。竹刀よりも打撃力は強い。
「吐け、吐いてしまえ」
吟味役人の言葉に合わせて、二度三度と下役人が笞を振り下ろす。
「ひいいいっ！」
ひときわ甲高く叫んだ女は、のけぞって横へ倒れた。大仰に足を蹴り上げたので、前が割れて内腿までさらけ出された。
「待たれよ」
香世の見えない所から声が飛んだ。
下役人が女を抱え起こして、裾を合わせてやった。
女は叩かれると、また横へ倒れて脛を晒した。再び吟味が中断される。
女を押さえつけておこうにも、下手をすれば押さえている者まで叩かれる。柱に縛りつ

けるのはご法度だった。
とうとう、吟味役人が匙を投げた。
「この性悪女めが。吟味法度を知り尽くしておる」
吟味役人が忌々しそうに女の肩を蹴った。
女囚への責めは下半身が露出すると中断されるらしいと、香世は知った。志津が全裸で市中を引き回されたこととの矛盾には気づかなかった。
半時ばかりの中休みがあって、今度は中年の大工が吟味にかけられた。この男はあっさりと、九両三分を盗んだことを認めた。十両盗めば首が飛ぶが、十両に満たなければ島流しか山送りで済む。責められる側も気組みが違った。実際に盗んだのがその金額かどうかは怪しい。盗られた側も犯人が死罪になるのをおもぱばかって、死罪にならないぎりぎりの金額を訴える場合があった。
吟味場に人が絶えてしばらくした頃、午の刻を告げる太鼓が鳴った。
香世にも食事が与えられた。雑穀を混ぜた麦飯と具のない味噌汁にわずかな干物。これ以上はみすぼらしくしようもない一汁一菜だったが、昨日の昼から何も食べていない香世だった。食事も喉を通らない思いに打ちひしがれていても、身体は正直だ。ちょっと箸を

つけたが最後、あっという間に平らげた。
満腹にはほど遠かったが、わずかでも腹が満たされると夜通し緊張していた反動がきた。いつしか香世は、壁にもたれて深い眠りに落ちていった。
本来なら、この横着な囚人は見張り番に叩き起こされるところだが、見張り番は戸惑っていた。預かり部屋に留め置かれるのは、長くて半日。朝早くから入れられた香世に、午後になっても入牢の沙汰がないのは、異例のことだった。
大倉屋の後を襲った小倉屋が、あちこちに賄賂をばら撒いているのは、小役人の末端まで知れ渡っている。何がどう転んで、香世が無罪放免になるか知れたものではない。見張り番は触らぬ神を決め込んでいるらしかった。

――大倉屋治平は、商人らしからぬ硬骨漢として聞こえた男だった。賄賂の要求などは真っ向からはねつけていた。船乗りどもには人気があったが、役人の覚えが目出度いはずもなかった。わずかな抜け荷を事荒立てて処罰されたのも、そのせいだと誰もが思っている。
小倉屋は、まるきり逆の男だった。賄賂は商人と役人の仲を取り持つ大事と心得て、運

転資金は事欠いても賄賂は絶やさなかった。
そういう意味では、長兵衛が山役人へ百両の付け届けをしてくれたことを、まったく香世は疑っていなかった。
町方奉行所から香世を名指しで両親の訃報がもたらされたのは神無月（十月）にはいって間もない頃だった。夫婦して山抜けを図り、国境まで逃げたところを捕まって斬り殺されたという。遺骸はその場に埋められて、遺髪の一本すらも持ち帰られなかった。
並んで申し渡しを聞く長兵衛の苦りきった顔とは対照的に、香世は淡々とした様子で役人に頭を下げた。だが、両親の死を他人事のように受け止められる十五歳の少女が、いるはずもなかった。囚人としては許されるかぎりの待遇を与えられていた両親が、なぜ山抜けなど試みなければならなかったのか。まったく納得できなかった。
香世は長兵衛の留守を狙って、奥座敷に忍び込んだ。手文庫の二重底に裏帳簿が隠してあることは知っていた。香世は六月の頁を繰った。二度三度と見た。七月、八月と見ていっても、山役人への百両は記帳されていなかった。
香世は激情にまかせて裏帳簿を破りかけたが、ふと思い直した。裏帳簿を懐へ入れかけて、また思案する。そうして、結局は元の場所へ戻した。香世が出奔したのは、その日の

うちであった。
十日と経たないうちに、香世は舞い戻ってきた。詫びと称して長兵衛に股間を丸められたのは先に書いたとおりだが、家を出ていたあいだ、どこで何をしていたかは、厳しく折檻されても頑として白状しなかった。
香世が切支丹に入信したのは、このときだったのだ。
大倉屋は網元の嘉助とは悪童仲間だった。両家の間には親族も同然の付き合いがあった。知らぬは亭主ばかりなりという諺があるが、香世も香世の母である松香も、志津が切支丹であることは薄々知っていた。
香世は志津を頼り、一切を打ち明けた。たとえ両親を助けるためだったにしても、人間としてあるまじき浅ましい真似までして、その罰ででもあるのか、天涯孤独の身となってしまった。神仏への信心も役に立たなかった。キリシト様におすがりして、せめてあの世では安らかに暮らしたい。そう言って志津をかき口説いたのだった。
哀れな少女の魂を救うことに、熱心な切支丹は躊躇しなかった。志津は神の教えを香世に伝え、朝晩ともに祈った。そうして香世の覚悟を見定めてから、無縁寺の一画に隠された教会へ香世を連れて行って懺悔をさせた。

香世は本式の切支丹になりたいと願ったが、教義もじゅうぶんに理解していない少女に洗礼を授けることは、とてもできない相談だった。香世はせめてもの心のよりどころとして、クルスをねだった。少女の境遇に憤り、かつ同情していたパアドレは、その願いは受け入れてやった。

香世はクルスを隠し持って小倉屋へ戻った。叔父が自分を騙していたことなどおくびにも出さず、ひたすら自分の身勝手を詫びた。叔父の夜這いも、これまでと変わらずにどころか、厭々ではなくむしろ喜んでいるかのように受け入れた。香世がわずかな食い物の代償に使用人たちに身体を触らせるようになったのも、この頃からだった。

淫乱小町の噂を流した張本人の梅香までが、それを信じた。長兵衛の要求も厚かましさを増して、吸茎やら抱きつき洗いやらを少女に仕込んだ。そのせいか、香世は急速におとなびた体つきになっていった。

香世は切支丹の教えに反する所業を繰り返しながら、七日に一度は志津の元を訪れて教義の勉強に励んだ。

そうして歳が明け、やがて志津が切支丹であることが露見したのだった。

「こら、いつまで寝ておるつもりか」
六尺棒で肩を小突かれて香世が目を覚ましたのは、夕刻になってからだった。
預かり部屋から引き出されて、香世はまた縄を掛けられた。囚人の移送には、たとえわずかな距離でも縄を掛けるのが仕来たりになっている。後ろ手に扼してから左右に分けて二の腕を別々に縛った縄を首筋でまとめて菱形を作り、前でも同じ形にしてから腰縄を結ぶ、いわゆる本縄である。縄を掛けてほどく時間のほうが、牢内を歩いた時間よりも長かった。
あらためて香世が入れられたのは、他の囚人たちから離されて平屋の土蔵の中に設けられた牢だった。板張りの床には畳もなく、筵が敷かれているだけだった。
その筵に先客が横たわっていた。男だった。その男が驚愕の表情を浮かべて、わずかに身体を起こした。
「お香世ちゃん。どうして……」
「御牢内である。静かに致せ」
役人が厳しく叱ったが、囚人が寝たままなのは咎めなかった。その男には、起き上がる体力さえないのを役人も知っている。

役人が立ち去ると、男は小声で香世に訊ねた。
「ここに入れられたってことは、切支丹の嫌疑だね」
男の顔を香世は見知っていた。浜永屋で船子として働いていた太吉だった。
「お香世ちゃんは切支丹の教えを学んでいたが、まだ切支丹にはなっていない。そこのところを、お役人に申し立てて分かっていただきなさい」
太吉に向かい合って座った香世は、静かに首を振った。
「わたしの心に神様は、ただおひと方しかいらっしゃいません」
「でも……」
太吉は言葉に詰まった。切支丹である太吉には、信仰を捨てろとは言えるはずもなかった。
「ひどい傷」
太吉の脛には幾筋もの深い傷が刻まれていた。午前中に香世が目撃した十露盤責めによるものに間違いなかった。そのせいで太吉の膝から下は動かせなくなっていた。
香世は身をかがめて傷に唇を押し当てた。
「お香世ちゃん……」

肩を押されても香世は離れようとしなかった。脛の傷ひとつひとつに口付けていった。
「神様、太吉さんをお護りください」
「そして、わたくしを責める者たちをお赦しください。彼らは何も知らないのですから」
香世の言葉を太吉が引き取った。
「アーメン」
ふたりの聖なる祈りが重なった。
どのように責められても信仰を捨てず、おのれを責めた者への赦しさえも祈る。このような連中を牢内へ解き放てば、いたずらに信者を増やすだけである。切支丹が他の者から離された牢へ押し込められるのも道理だった。
何も与えられていない牢内で、香世に出来ることは知れている。香世は苦痛に呻く太吉の身体をさすりながら、志津とは比べ物にならない拷問が加えられていることを知った。
太吉には財産といえるほどのものはない。処刑したところで、藩の金庫は雀の涙ほども潤わない。となれば、何がなんでも棄教させるにしくはなかった。
切支丹を転ばせるには心を攻めるのが上策とはいえ、太吉に対してはその手段がなかった。強いていうなら、太吉の誇りは頑健な肉体である。その肉体を破壊することで心の支

えを奪おうと、役人は考えたのかもしれない。
もうひとつ、太吉への拷問が苛烈をきわめたのには理由があった。志津への拷問は、実は棄教をうながしたものではなかった。隠れ寺を突き止めようと、これには役人たちも本気になっている。太吉が捕まらなかったら、志津が同じ目にあわされていたかもしれない。いや、女人の身には、より残酷な責めが加えられていただろう。
志津が拷問に屈して信仰を捨て、隠れ寺のありかを吐いたところで、浜永屋を召し上げる手段がないでもない。志津を責め殺して、最後まで棄教しなかったと強弁するのだ。証拠を捏造しなければならないし、幕府への届出も著しく煩雑になるが、その手間をかけるだけの値打ちはある。
残虐な拷問を免れて殉教をまっとうできた志津は、幸運に恵まれていたといえなくもなかった。
――小便をしたいと言って、太吉が床を這った。厠はない。牢の奥に大甕と踏み台が置かれていた。太吉はそこまで行って、壁にすがって立ち上がろうとした。香世は遠慮する太吉の懐に身体をねじ入れるようにして肩を貸した。
太吉が放尿すると、目の痛くなるような異臭が大甕からたちのぼった。

香世も未明から排泄の機会がなかった。いったん尿意づくと、とても我慢できなかった。太吉を元の場所に寝かすと、踏み台に上がって尻をまくった。

四．極限拷責

翌日。巳の刻（午前十時）ちかくになって、ふたりの役人が姿を見せた。ひとりは、香世を牢屋敷まで連行して身体検めまで図々しく立ち会った男だった。

「社寺方同心小頭、前田数馬である」

奉行の下には数人の取調役が配され、その直属の部下が同心小頭である。三十を幾つか過ぎたばかりの男ならば抜擢といえた。

「小倉屋長兵衛の預かり人、香世。お取調べである」

若い同心が藤井進五と名乗ってから、恫喝するように告げた。

牢番が格子を開けると、引き出されるまでもなく香世は外に出て板敷きの上に座った。牢番が本縄を掛ける。

切支丹牢は牢屋敷の裏庭に建てられた平屋の土蔵の中にある。吟味部屋とは目と鼻の先だった。

「聞けば、おまえも可哀そうな身の上じゃな。神仏に愛想を尽かして、異国の神にすがり

たくなる気持ちも分からぬではない」
香世を板の間に座らせて、数馬は搦め手から始めるようだった。
「おまえも太吉も、あの志津にしても、取り立てて罪を犯したわけではない。いささか毛色の変わった信心に凝り固まっているだけじゃ」
この国には八百万（やおよろず）の神がいる。あと一体くらい増えてもかまわぬと、上役が聞いたら仰天しそうなことを数馬は言った。
「しかも、キリシトは悪行をそそのかすでもない。殺すな、盗むな、人を恨むな、親切にせよ」
そのような立派なお題目を唱える切支丹が、なぜ邪教として忌み嫌われるのかと、数馬は問うた。
香世は、ぽかんとした表情で数馬を見上げるばかりで、答えられるはずもなかった。
「キリシトの教えは立派じゃ。切支丹の国の殿様は、さだめし立派な御人であろう」
切支丹の国の殿様と、この藩の殿様の、どちらの言うことを聞くのかと、数馬は斬り込んできた。宗教による侵略という概念を、この男はそれなりに理解しているようだった。

「難しいことは、わたしにはわかりません」
香世は、そう答えるのが精一杯だった。
「キリシト様、マリア様。わたしをお守りください。勇気を与えてください」
香世は表情をあらためて天を仰いだ。
「天にまします神様。御名をあがめさせたまえ。御国をきたらせたまえ。御心の天にありますように、地にも為させたまえ。わたしたちの糧を今日も与えたまえ」
香世の唇が祈りの文句を紡いでいく。
「小娘が、生意気なっ」
激昂して、同心の進五が香世の頬を張った。
「あっ……！」
一瞬ひるんだ香世だったが、祈りはやめない。
「……国と力と栄えは、すべて神様のものです。アーメン」
「それがいかんと言うのだ」
祈りが終わった途端に数馬が言った。
「この国が切支丹の神のものだなどと、それでは宗門一揆も同じではないか」

香世は落ち着いた顔を同心小頭に向けた。
「お役人様と教義問答をするつもりは、ございません。切支丹がいけないとおっしゃるのでしたら、市中引き回しでも磔でも、存分に成敗なさってください」
暫時、数馬は香世の顔を覗きこんだ。負けずに、香世も同心小頭を見返した。先に顔をそらしたのは、数馬のほうだった。
「よかろう。存分にしてやろう」
控えていた下役人に数馬が顎をしゃくった。
囚衣の襟がはだけられ、二の腕に縄が足された。邪魔にならぬようにと、髪はふたつに分けて前へ垂らされた。
剥きだしになった香世の肩に笞が叩きつけられた。
肉をつぶす重い音が吟味部屋に響く。わずかに呻いただけで、香世は苦痛を耐えた。
たてつづけの打撃。香世の顔が苦痛にゆがんだ。
「あ、うう……神様、わたしを叩いている人をお許しください。この人は何も知らないのです」
十打ほどで肌が破れて、香世の肩が血に染まった。死罪にならない程度の罪に問われて

いる者は、この段階で自白してしまう場合も多い。無罪放免につながる棄教を迫られながら、それを拒絶するには途方もない精神力が必要だ。
二十打で、数馬が下役人を止めた。
大きく息を吐いて、香世が横に倒れた。
「神の試練を耐えたと思っているのだろうな」
数馬が意地悪そうに言った。
「並みの吟味なら、とっくにお留めがかかっておるわ」
しかし、切支丹への責めはこれからだと、数馬がうそぶいた。
数馬の指図で、下役人が香世の縄を解いた。痺れた手首をさする暇も与えず、香世の囚衣が剥ぎ取られた。
「あっ……いやっ！」
弱々しい抵抗など歯牙にもかけず、下役人は香世の手首を別々の縄で縛って天井の梁から吊るした。足首にも縄を掛けて、左右に引き広げた。香世は大の字の形で宙吊りにされた。髪は、今度は背中へまわされた。
折檻のたびに尻を晒し、長兵衛には淫らな姿態を幾十度となく強いられてきた。肌襦袢

で縄目を受けて街中を歩かされても、身体検めで屈辱的な姿勢をとらされても、取り乱すことのなかった香世である。今も気丈に宙を見据えていたが、四肢を縛されて広げられたあまりに無防備な裸身は、羞恥に染まるよりも、これから肉体に加えられるだろう苦痛を予感して血の気が失せたように青白かった。

「責め手を許してくださいと神に祈っていたな。では、わしも許してもらえるように祈ってくれよ」

数馬は下役人から笞を取り上げて、香世の正面に立った。

「そうらっ！」

掛け声とともに、袈裟斬りそのままに笞を香世の乳房に叩きつけた。剣術の心得ある者が間合いを計って撃ち込むのだ。片手だとはいえ、ただ力まかせの下役人とは打撃力が違う。小ぶりだが椀を伏せたように形の良い乳房が、無残にひしゃげた。と同時に、甲高い悲鳴が香世の喉から噴きこぼれた。

長く尾を引いた悲鳴が消えかかる頃合を狙って、数馬は反対の乳房へ撃ち込んだ。再び悲鳴が吟味部屋に谺した。

二度三度と繰り返すうちに、香世の乳房は紫色に腫れあがった。

香世の背後に位置を変えて、数馬は尻と脇腹を打ち据えた。白桃のようだった尻が腐りかけた葡萄のように変わった頃には香世の喉も掠れ、壊れた笛のような響きしか出せなくなくなっていた。
数馬は手を休めて、顔の汗を拭いた。
香世の髪をつかんで仰向かせ、股間を笞の柄でくじった。
「これだけ非道なことをしても、キリシトはわしを許してくれるのかな？」
覗きこまれた視線をはね返す気力は、すでになかった。それでも、香世は祈りの文句を口にした。
「これまでは、まだ手加減をしてやったのだぞ」
香世の耳元で、数馬が粘っこくささやいた。
「まだ打っていないところがあるな」
笞の柄が、ぐりっと股間を抉った。香世が息をのんで数馬を見た。
「今いちどだけ聞くぞ。邪教を捨ててくれぬか」
香世は全身を小刻みに震わせながらも、気丈に答えた。
「インヘルノで永遠の苦しみを味わう恐ろしさに比べれば、肉体を滅ぼされる苦しみなど

平気です」
「そう簡単には滅ぼしてやらぬぞ」
数馬は一歩下がって、笞を両手で下段に構えた。
「むんっ！」
香世の股間を斬り上げた。打撃の寸前に左手を跳ね上げて切っ先の勢いを削いだが、それでも香世の耐えられる限界を超えていたことには変わりなかった。
「ぎゃああっ！」
野太い咆哮とともに香世の全身が痙攣して、そのままがっくりと首が垂れた。
香世を蘇生させようとした下役人を、数馬が制した。
「捨て置け。つづきは昼からじゃ」
まず数馬と進五が立ち去り、下役人は香世の汗と血で汚れた床を拭いてから、これも昼餉をとりに賄い所へ行った。
全裸で大の字に吊るされた香世が取り残された吟味部屋に、正午を告げる太鼓の音が響いた。

香世が息を吹き返して間もなく、役人どもが吟味部屋へ戻ってきた。香世に棄教の意思がないことを形式的にたしかめてから、つぎの拷問に取り掛かった。
下役人が香世に縄を掛けようとするのを制して、数馬がみずから縄をとった。
「どうせなら、責められている間も神に祈っていたかろう」
香世は背中で手首をひねられて無理やりに合掌させられた。二の腕から肩に激痛が走り、自然と胸を突き出す姿勢になった。二の腕にも縄が掛けられ、左右に張った肘を後ろへ引き絞られた。
「く、くうう……」
こらえきれずに呻く香世。
数馬はお構いなしに縄を足していく。胸の上下を縛り、首縄から垂らした縄で乳房の間を絞った。本縄でも早縄でもない変則的な形だった。囚人に苦痛を与える目的があったにしろ、女体を縛ること自体に愉しみを覚えている節が見受けられた。
上半身を緊縛された香世は、十露盤の上に座らされた。ただ座っただけで、三角に割った木の先端が脛に食い込んで、耐え難い痛みを香世に与えた。前かがみになろうとする肩が引き起こされて、背後の柱に括りつけられた。

下役人が平たい石を抱え上げた。長さ三尺、幅一尺、厚さは三寸もあろうか。目方は、へたをすれば香世と同じほどもある。
「やれ」
数馬が短く言うと、下役人は香世の膝へ抱き石を無造作に乗せた。
「ひいいっ……！」
覚悟はできていたかもしれないが、実際の責めの辛さは少女の予想を超えていた。香世は苦痛に喘ぎ、のけぞって頭を左右に振った。
「もう一枚」
数馬が無慈悲に言う。
いっそう甲高い悲鳴が吟味部屋に響いた。
三倍にも増えた自分の重みを、脛に食い込んだ五本の稜線で支えねばならない。香世の全身は、脂汗にまみれていった。
数馬は冷徹に香世を観察している。悶絶には程遠いと見てとると、積んだ石の上に片足をどすんと落とした。
絶叫する香世。

「切支丹は責められれば責められるほど、神の試練とやら言うて法悦を味わうというが」
足で石を揺すりながら、揶揄するように数馬が言った。
「どうじゃ、嬉しいか？」
香世は大きく口を開けて喘ぐきりで、祈りを唱える余裕もないようだった。数馬の声が聞こえているのかも怪しい。
「まだ足りぬと申すか」
数馬は細竹の乗馬鞭で香世の肩を打った。
力まかせに打っても馬体をさして傷つけない鞭である。香世は打擲にまったく反応しなかった。
「もう一枚、乗せてほしいのか？」
香世の頭が弱々しく横に振られた。
「そうじゃろうの。か弱い女の身じゃ。三枚も乗せれば脛が砕けるぞ」
数馬は石から足を下ろして、香世の前にしゃがみ込んだ。
脛にかかる重みがわずかに減って、香世がはあっと息を吐いた。
数馬が乗馬鞭の先端を乳房に這わせた。紫色に腫れあがったうえを縄でくびり出されて、

倍にも膨らんだ乳房に繊細な刺戟を受けて、香世はかすかに身悶えた。
その様子を観察する数馬の顔を、怪しいかぎろいが掠めた。
「前田殿」
同心の藤井進五が苦々しそうな声をあげた。
「初日から詮議の手を緩めるのは如何かと存じます」
一年ほども数馬に従っている進五は、先輩の悪癖を知悉していた。
「初日だからこそだ」
馬の耳に念仏ほども耳を貸さない数馬。
「邪教を信じるまでには、いろいろと迷いもあったはず。じっくりと責めていけば、その迷いが甦ってくるというもの。考え迷うくらいの気力は残してやらねばならん」
とはうそぶいたものの、どことなく鼻白んだ風情だった。
「このまま、じっくり考えさせるとしよう」
数馬は立ち上がると、太吉を連れてこいと進五に命じた。
「まだ一昨日の傷が癒えておりません。すくなくとも五日は養生させよと医師が申したのを、前田殿もご存知のはず」

進五が諫言した。
「かまわん。明日は我が身と、この娘に思い知らせてやる」
「それは、まあ……御奉行のお指図もあることですし」
不得要領につぶやくと、進五は下役人を連れて吟味場を出て行った。
ほどなく、本縄を掛けられた太吉が戸板で担ぎ込まれてきた。
裸で十露盤責めに掛けられている香世を見ると、太吉は不自由な身体をもがいて上体を起こした。
「前田様。香世は切支丹ではありません」
責め苦に喘いでいた香世が、はっと息を詰めて顔を上げた。
「香世がわしらに交じって祈りの真似事をしていたのは本当です。ですが、切支丹の教義を半分もわかっていません」
苦しそうに息をつぎながら、太吉が訴えた。
進五が訝しげに太吉と香世を見比べている。数馬は動じたふうもなく、太吉を見下ろしていた。自分の言葉を信じてもらおうとしてか、太吉は口を滑らせた。
「とても洗礼は授けられないと、パアドレ様も言っておられました」

「そのパアドレは、どこにおる！」
鋭い声で数馬が問うた。
あっと凍りつく太吉。南蛮人のパアドレは半年前に他藩へ行き、コンフェラリア（信心組）の束ねは修道女の資格を持った志津が務めていたという主張が嘘だったと、みずから暴露してしまったのだ。
「おまえの言葉が偽りでない証に、パアドレの居場所を吐け。そうすれば、あの小娘は放免してやっても構わぬぞ」
「厭です！」
声の主は香世だった。
「洗礼は受けていなくても、キリシト様を信じる心に変わりはありません。わたしは切支丹です」
放免されても、香世の身辺は見張られるだろう。礼拝に行くなど、とてもできない相談だ。いや、それ以前に――誰もが、香世は棄教したと思うに決まっている。世間から後ろ指を差され、仲間だった人びとからは裏切り者として蔑まれる。殉教の栄光とは雲泥の相違である。香世が必死になっても不思議ではなかった。

「よかったな、太吉」
数馬が薄笑いを浮かべた。
「パアドレを匿いとおしてくれと、香世も言っておるぞ」
数馬が、今度は下役人に命じて太吉を縛り直させた。左右に分けて足首を縛り、後ろ手の縄尻と合わせて、天井の梁から吊るした。太吉の身体が弓のように反った。十露盤責めに使う抱き石を四枚も背中に乗せて、ずれ落ちないように縛った。
みしみしという不気味な音は梁が軋んだのか、太吉の背骨が軋んだのか。
「これしきでパアドレを売っては、申し訳が立たぬよなあ」
進五が、ふっと首をひねった。
逆説的な物言いで囚人を脅すのは、数馬の常套手段である。しかし、身体が弱りきっている太吉に過酷な責めを加えるのは適切だろうか。これまでは太吉の心を攻める方策がなかったが、今は違う。
香世が切支丹であれば、どんな拷問にも屈するなと、心の中で祈ってもいられよう。しかし太吉の目には、香世は信者として映っていない。いわば無実の者である。太吉の信仰が篤ければ篤いほど、無実の少女が苦しめられるのを見過ごすことはできないのではなか

ろうか。
それとも、数馬は狙いを香世に絞ったのだろうか。香世もパアドレと会っているのであれば、隠れ寺の所在も知っている。付け焼刃の信仰を捨てさせるのは、そう難しいことではあるまい。
そんな思考の過程をたどったのでもあろうか。進五は黙って上役の指図に従った。宙吊りになった太吉の身体を笞で打ち据え、下役人を手伝って独楽のように太吉を回した。
そうして一刻ほども駿河問いが続けられた。悶絶した太吉は下におろされ、香世も十露盤責めから解放された。
厳しい合掌縛りで痺れた腕では、囚衣に腕を通せても紐を結ぶまではできなかった。着崩れて乳房を晒したまま、香世は本縄を掛けられた。脛の傷だけは別室で手当てを受けてから切支丹牢へ戻された。
太吉は牢へ戻ることがなかった。翌朝になって、太吉は自害したと牢番が香世に告げた。切支丹が自害するはずがない。責め殺されたに決まっていた。
香世は太吉のために祈った。祈りの文句は短かったが、香世はいつまでも祈りの姿勢を崩さなかった。

一日をおいて入牢三日目は朝から、香世への二回目の拷問がおこなわれた。
香世は当然のように素裸にされて、駿河問いに掛けられた。
そのまま吊られただけで、肩と内腿に激痛が走ったが、香世はわずかに呻いただけだった。背中に乗せられた抱き石は一枚きりだった。太吉と香世の体力差が考慮されていた。それでも、体重が倍になったに等しい。
「う……ぐううう……」
香世の口から間断なく呻きがもれはじめた。
「太吉の苦しみ様は見ていたであろう。同じ目にあいたいか？」
数馬が笞を持って香世の前に立った。この男は、香世を縛るのも下役人にはまかせていなかった。
「か、神様が与えてくださる……試練です。太吉さんと……同じように、耐えます」
苦痛の中でしぼり出した香世の言葉を、数馬は嘲笑した。
「残念じゃが、太吉と同じというわけにはいかんぞ」
自然と開いた内腿の間へ笞の先をこじ入れた。

「ひっ……」
女芯を乱暴に突かれて、さすがに香世が悲鳴をあげた。
「振り回すにしても、女のほうが掴み所が多いしな」
数馬は乳房を掴んで香世の裸身を揺すった。
「ぐ……」
香世の顔が苦痛にゆがんだが、今度は悲鳴をあげなかった。それを強情と思ったか、数馬は香世の身体をゆっくりと回しはじめた。乳房をつかみ、股間に手を差し入れ、女の恥ずかしいところばかりを手がかりにしている。
二十回も回すと吊った縄は撚り合わされて、手首と足首が接するまでになった。香世の呻き声は大きくなったが、まだ耐えている。
「苦しいじゃろう。楽にしてほしいか」
香世は首を横に振った。楽にするとはどういう意味か、太吉への責めでわかっていた。
「このままでいたいのか。じゃが、わしの手も疲れた」
数馬はこれまでとは反対の方向へ乳房を思い切り振った。縄の撚りが戻る勢いも手伝って、香世の裸身が独楽のように回った。

「うあああああっ！」
ついに香世の口から絶叫がほとばしった。四肢が引き抜かれるような激痛に加えて、遠心力で頭へ血がのぼり、目の前が真っ赤になる。か弱い少女に耐えられる責めではない。
回転の勢いで縄が反対へ撚り合わされ、回転が止まった次の瞬間には逆回転を始める。逆回転の途中で香世の頭が、がくんと垂れた。それでも、自然に回転が止まるまで責めは続けられた。
太吉の場合は幾度も回され、吊るされたまま笞で叩かれたのだが、香世は早々に駿河問いから解放された。それは、香世が女であるがゆえだった。
息を吹き返したとき香世は、自分が縦に吊るされているのを知った。脚は折り曲げて別々に縛られていた。
「ずっと吊られていてはしんどかろうな」
数馬が言う。同じ嘲笑にしても、淫靡な翳りがあった。
「座って休むがよい」
下役人が縄をゆるめると、香世の身体が下がっていった。
「ひ……」

香世は下を見て息を呑んだ。
膝頭のすぐ下に、縁台のようなものがあった。しかし台は平らではなく、鋭角に尖っていた。さらに吊り下ろされればどうなるか、香世は即座に理解した。
「お、お役人様っ！」
香世は声を振り絞った。
「これだけは、お許しください。ひどい……あんまりです！」
香世の懇願は無視されて、じりじりと鋭角の稜線が迫ってくる。膝頭が木の肌に触れた。
「……！」
香世は渾身の力をこめて、膝頭を合わせた。が、果敢ない抵抗でしかなかった。数馬と進五が左右から香世の膝頭をつかむ。
「や、やめて……」
脚が左右に割り開かれ、その中心に稜線が食い込んだ。
「いやあああっ……！」
身体を吊っていた縄が緩み、女芯の合わせ目に全体重を加えられて、香世は絶叫した。
これまでは健気にこらえていた涙が、香世の両目にあふれた。

香世は内腿に力をこめ、上体を反らせて、女芯を抉る激痛をすこしでもやわらげようと頑張った。口を開けば神への呪詛を喚きかねないとでも思うのか、祈りの言葉は聞かれなかった。

「医師はな、痣が消えるまでは笞をひかえろと言いおった」

回復力の旺盛な若い肌にも、一昨日の叩き責めの痕はまだ残っていた。

「如何に吟味法度の埒外とは申せ、医師の言葉までは無視できぬ」

だから、おまえを笞で叩くような非道はせぬと、数馬がうそぶいた。うそぶいて、荒縄の先に結び瘤を作った束を香世の眼前に突きつけた。

「これで叩くだけにしておく」

香世に見えるところで、縄の束を水桶に浸けた。じゅうぶんに湿してから、縄束を構える。

「転ぶのなら、今のうちだぞ」

香世は顔面蒼白になって縄束を凝視していたが、それでも首を横に振った。

「神様、香世をお守りください。お役人様に肉体を滅ぼされても、魂は神様のもとへ参ります」

アーメンと言い終らぬうちに、縄束が香世の尻に叩きつけられた。
「ぎゃあああっ！」
少女のものとは思えぬ吠え声が吟味部屋をどよもした。水をじゅうぶんに吸った荒縄の束が尻を打つだけでも、耐えがたい苦痛である。しかも、苦痛にのけぞれば、三角木馬の稜線が女芯をえぐる。喚かぬほうがおかしい。
幾度となく尻を打ち据えられて、少女はしゃくりあげ始めた。数馬は、ふたたび少女の前へ動いた。しかし、それは棄教の意思を問うためですらなかった。
「いや……もう、許して」
責め手の意図を察して、少女は力なく懇願する。数馬は容赦なく縄束を振りかぶる。
ばしっ！
乳房がひしゃげて跳ね踊った。
「ひいいっ……ふうう」
香世は意外にも安堵の息を吐いた。乳房を引き千切られるような激痛も、女芯を切り裂かれる痛みに比べれば我慢できないものではなかった。が……
「ぎゃあああっ！」

縄束に下腹部を直撃されては、たまったものではなかった。少女は吠えながら涙を振り散らかした。
「こんな酷い目にあっているおまえを、なぜ神は助けてくれぬのかな？」
数馬は木馬の背に沿って指を進め、香世の股間を抉った。萎縮して肉襞の奥に隠れている木の芽を探し出し、指の腹で転がした。
「あ……」
圧倒的な激痛の間隙を縫って与えられた、かすかな刺戟。香世は悩乱した。それは、香世が被虐に開眼する先駆けでもあった。
「どうじゃ？　切支丹は魂を重んじて肉体をないがしろにするが……肉体がなければ、このような心持ちにはなれぬであろう？」
苦痛と快楽に翻弄されながら、香世は自分を見失わなかった。
「ぱ、パライソで賜る魂の永遠の平安に比べれば……獣のごとき悦びなど……」
過酷に責められながらも愉悦をしぼり出されたと認めていることに、香世は気づかなかった。
数馬が淫靡に嗤った。

「そうか。ならば、肉体があるゆえの苦しみも教えてやるとしよう」
その言葉は、切支丹信者を転ばせる目的で吐かれたにしては、適切ではなかったかもしれない。
折り曲げられた香世の膝に縄が通された。その縄に抱き石が結ばれて吊り下げられた。
「ぎゃあああっ！」
香世はのけぞって硬直した。わずかでも体重を支えようとして締めつけた腿の筋肉が小刻みに痙攣を始めた。
「しぶといな」
数馬が大きな木槌を手に取った。三角木馬も大槌も、吟味部屋に常備されている責め具ではない。昨日のうちに数馬が物置蔵の奥から引っ張り出したものである。三角木馬などは、わざわざ大工を呼んで、表面に鉋をかけさせていた。
木馬の正面が大槌で叩かれた。白刃を素足で渡る荒行がある。刃物は押しつけるだけでは切れないことを利用した、一種の手妻である。いま、香世の女芯に押しつけられていた三角木馬の稜線が前後に振動した。
ゴンという大きな響きに混じって、ぴしっと何かが裂ける音を、香世だけは聞いていた。

白木を鮮血が伝い落ちた。
「おっ母さん……助けて！」
神の名ではなく母を呼んで、少女は悶絶した。

今日の香世には、意識を失う贅沢すら許されなかった。裏庭に運ばれて、目を覚ますまで水を浴びせられた。
自分では立てず、下役人に引きずられて吟味部屋へ連れ戻される香世。縄をほどかれると、かすかに安堵の色を浮かべた。
横座りになって手首を揉んでいる香世の前に、分厚い碁盤が置かれた。
「……？」
おびえた表情で数馬を見上げる香世。
「娘の手を、ここへ乗せろ」
下役人が怪訝そうな表情で香世の手をつかんだ。下知されるままに香世を正座させ、掌を碁盤に押しつけた。

数馬が小さな鋏（かすがい）を幾つも取り出すと、進五が「あっ」と小さく唸った。数馬の意図を察したのである。

香世の指が広げられて、碁盤に打ち込まれる鋏で一本ずつ留められていった。

しゃらりと、数馬が碁盤の上に並べたのは長さ一寸半ほどの縫い針だった。香世はそれを惚けたように見つめている。こんな小さな品が笞や木馬よりも恐ろしい責め具になるとは、想像もできないでいるようだった。

数馬が針を取り上げて、香世の左手の中指に持っていった。その先端が、爪と肉の間にあてがわれた。

「ひっ……！」

何をされるかようやく理解して、香代がしゃっくりのような悲鳴をあげた。

「邪教を捨てるか？」

目を覗きこまれても、はね返す気力など、とっくに失われている。香世は顔をそらせた。

「神様……お守りください」

そうつぶやくのが精一杯だった。

ふんと嗤って、数馬が針を無造作に進めた。
「きゃあああああああっ……！」
これ以上はないというほど甲高い悲鳴が、香世の喉から迸った。
針は爪の半ばまで突き刺されていた。
針責めは刺す瞬間には耐え難い先鋭な苦痛をもたらすが、刺した後は痛みが薄らぐ。そんなことは百も承知の数馬だった。針の端を指で弾いて、香世の喉から悲鳴を絞り出した。
二本目は右の人差し指に打ち込まれた。喉をさらして絶叫した香世が、不意に咳きこんだ。涙に混じって赤い飛沫が、香世の腕に散った。
左の小指への三本目で香世の悲鳴は枯れた。喉からは激しい木枯らしのような音が吹き出するばかりだった。
そうして四本目が左の親指へ刺されようとしたとき。
「す……すて……」
香世の口が動いて、掠れた声になった。声が言葉を紡ごうとした寸前、数馬が大声で宣告した。
「今日はこれまでじゃ」

言うなり、さっさと針を抜きにかかった。
香世は涙と鼻水で濡れそぼった顔で数馬を見上げ、そのまま気を失った。
「なぜです、前田殿」
藤井進五がきつい声で問うた。
「たしかに『すてる』と言いかけましたぞ。なぜ、責めを打ち切られた？」
「こやつは切支丹になって日が浅い。性根が座っておらん」
「そのほうが、手間が省けるというものです」
「そうではない」
不服そうな顔つきの後輩に、数馬は説いて聞かせた。
「いい加減な信心だから、あっさりとケツを割った。このまま放免してみろ。喉元過ぎればなんとやら。あれしきの責めなら耐えられるなどと思い違いをしかねんぞ。また切支丹に戻られたら、社寺方の面目が丸つぶれじゃ」
「ですが、転ぶと言う者を責めるわけにはいきますまい」
「だから、言わせなかったのだ。じっくり考える時間を与えるのだ。たっぷり休養させてやって、それでも神を捨てると言うなら信じてもよかろう」

数馬の言い分にも一理あった。現代でも裁判で自白を翻す例は枚挙にいとまがない。拷問から逃れようとして一時逃れに棄教を口走ることはじゅうぶんに考えられた。筋金入りの切支丹なら、それでも信用できなくもない。神を捨てると言ってしまったという自責の念が、再び信仰の道に戻る妨げとなる。しかし、洗礼も受けていない者は――自分は未熟だったから、責めに負けた。今度こそ揺るぎない信仰を持とうなどと考えかねない。

「なるほど。手前の考えがいたりませんでした」

進五は潔く先輩に頭を下げた。